

分 野 : Ⅲ 気管支ぜん息等の動向等に関する調査研究
② 指定地域を対象とした気管支ぜん息等の予後と併存症(鼻炎・肥満等のぜん息増悪の危険因子)に関する調査研究
Ⅲ-②
業 務 委 託 名 : 指定地域を含む地域を対象としたぜん息患者数の実数把握と予後や併存症に関する調査研究

調査研究代表者氏名: 手塚 純一郎

1 評価項目						
5点:大変優れている(A判定) 4点:優れている(B判定) 3点:普通(C判定) 2点:やや劣っている(D判定) 1点:劣っている(E判定)						
	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
(2) 研究成果目標の達成度	2人	4人	0人	0人	0人	4.33
(3) 研究計画の妥当性	1人	5人	0人	0人	0人	4.17
個別評価(第3評価):(2)(3)の平均						4.25
(6) 総合評価(第2評価)	3人	3人	0人	0人	0人	4.50
全体評価(第1評価):(2)(3)(6)の平均						4.33

2 記述評価
・小児の領域では優良な研究進捗状況である。 ・思春期成人の領域での研究成果は今の時点ではまだ不十分である。 ・引き続き発展的に継続が必要な研究内容だと考えられます。 ・経口ステロイド使用群の中の生物製剤の使用群と非使用群との比較検討で、骨折や骨粗鬆症の発症が有意に生物製剤使用群で低いことが、継続的解析で明らかにされることを期待する。 ・生物製剤は小児重症喘息患者に使用されることで十分な費用対効果があると期待しているが、薬価が高価であることを考えると、喘息小児の約5%に使用されているという調査研究結果の現状は多すぎて問題と思う。投与されている患者の経済的負担が少ないことが反映されているのかとも思われるが、健康保険の健全な持続性の観点から、生物製剤の適正使用に資するデータが求められると共に、小児アレルギー専門医が重症喘息小児に対する生物製剤の使用を推奨するにあたり我田引水にならないような注意が必要であろう。この点は小児アレルギー学会や日本アレルギー学会等での繰り返しの情宣活動を期待する。 ・同一手法による継続的な重要な調査研究です。 ・更に最近の進歩にそって、新規方法を導入している点を評価します。 ・長期のデータの変化から、生体や環境の変化の関与についても、検討や考察できることを希望します。 ・概ね順調に研究が進展している。研究成果の論文公表が待たれる。 ・地域ベースの喘息・アレルギー疾患の有病率等の動向について、種々の調査手法・データソースの比較検証を通じて、信頼できる成果が得られることを期待する。